

現場指示における指示詞の切り替え

—相互行為分析のアプローチから—

党 歆（関西学院大学大学院生）

1. はじめに：

日本語における現場指示の研究は主に「人称区分説」（佐久間 1951；三上 1955；正保 1981）、「距離区分説」（坂田 1971；金水・田窪 1992）から説明されてきたが、これらの研究では指示詞の使用を文法問題として取り扱ってきた。しかし、実際の自然会話の中で、それらの説に則しない指示詞の現象がしばしば観察される。例えば、平田・山本（2016）は会話データに基づき、話し手は「遠」である、もしくは会話参加者の領域外にあるとみなした対象をコ系、ソ系、ア系の全てを用いて指しうると指摘している。また、平田（2020）は Strauss（2002）の英語の指示詞研究を踏まえ、一連のやり取りの中で、一つの指示対象を複数の指示形式が用いるという指示形式の交替¹が共同注意確立活動²前後に現れ、「注意度合い」によって行われると指摘している。他方、指示詞の切り替えという現象では、会話参加者の間でどのように指示対象に対する共同認識が達成するのかが扱われてこなかった。本研究は、指示詞の切り替えに焦点を当て、実際の会話の中で指示詞の切り替えがどの位置で、どのように行われるのかとその理由を明らかにしたい。

2. 研究目的

本研究では、共同作業の過程において同一話者が「これ」で指し示した対象を次に「それ」で指示するなど、同じ指示対象を一連の会話の中で異なる指示詞で指し示す現象を「指示詞の切り替え」と呼ぶ。以下では、同一話者が「これ」で指し示した対象を次に「それ」で指示するデータを分析して、このような指示詞の切り替えはどのような位置で、どのように、なぜ行われるのかを会話分析の手法を用いて見ていく。

3. データの概要

本研究では、二人の日本語母語話者である M と T がプラモデルを組み立てる共同作業場面を録画したデータを分析対象とする。共同作業で二人がしているのは、机においているピース説明書と組み立てるステップの説明書を参照しながら、4つの板から必要なピースを外して、組み立てる作業である。トランスクリプトには、特に会話参加者の視線や指さしなどの身体動作を特定の記号を用いて文字化する。記号の詳細は、本稿末の記号の一覧を参照されたい。

4. 分析結果

この断片では、指示詞の切り替えが二箇所ある。05 行目の「これ」が 10 行目で「それ」に切り替わっている。さらに、16 行目の「これ」も 18 行目で「そいつ」に切り替わっている。

断片

01 T : #*で : , . hh エーのいち。

t : *ステップ説明書---->

m : #板-B

ステップ説明書----->

02 (2.6)

03 T : エーの 1 で [()



図. 二人の位置関係と 05 行目での様子

¹ 本研究では指示詞の切り替えと呼ぶ。

² 対話参加者が、意図する対象に聞き手の注意を誘導し共同注意を確立させようとする一連のやり取り。

t: ,, , ピース説明書,, ,板--->
m: ,, , 板----->

04M : #[エーって (どれでしたっけ)
m:#板-A----->

05T : → +こ>これでした (よね/やろ) たぶん<い+
t:+ ptg----->
m: † ----->

06 (1.8)
t: ,, ,説明書----->
m: ----->

07M : え? +2† じゃなかったですっけ.
m: 板-A+ ptg
ピース -, , , ピース説明書----->
t: † ピース---, , , ピース説明書--->

08T : あそうか.

09 (3.3)

10T : →や, >それ<エーいち=↑あちがう. えとね
((mは07行目の動作を保持している))

11 (1.3)

12T : .hhh (.) えとね:
t:ptg 準備
ステップ説明書----->
m:ピース説明書 ----->

13 +小†文字のエーのいちで (.) +こ†れ大文字のエーのいちだから:
t:+ ptg +ptg
>>--ステップ説明書----->
m: † ...----- ,, ,板----- †...----- ,, ,板--->

14 えと: ですね +エー: でしょうい
t:ピース説明書+ptg ----->
m: 板---> † ----->

15M : うん

16T : → +こ†れ (.) つまり+こ†れ,
t:+ptg A-1 +ptg
m: †,, , ,, , † ----->

17M : おう+: : #
m: +ptg A-1#板-A
----->
t: ステップ説明書 ----->

18T : → >そいつそいつ<
t: ステップ説明書 ----->>
m: #板-A ピースを外す----->>

19M : やすごいなあやっぱりわたし見つけられないなあ. ↑

まず、この断片の05行目と10行目の指示詞の使用に注目してほしい。05行目で指示されたピースがはまっている板AはMが持ち上げている。そのため、このピースはMの領域にあるものと認識可能である。「なわばり説」によると、相手(M)の領域に属するものを指示するときは、「それ」が適切である。しかし、05行目でTは指さししながらその板にあるピースを「コ」系列で指し示す。他方、10行目で05行目と同じ指示対象を指し示すときは、1節で述べた諸説と一致しており、TはMが持ち上げている板の指示対象を「ソ」系列で指し示す。なぜ05行目で相手に近い指示対象をわざわざ指さししながら「これ」で指し示したのか、そして、10行目では同じ対象を「それ」で指し示したのか。このような指示詞の切り替えが行われたのかを分析するには、まず、この断片で2人が何をしているのかを見ていく必要がある。

01行目ではTが「で、エーの1」と発話して、前の作業が終わり、次の作業に入ろうと主張している。発話と同時に、Tはピース説明書と板を見ながらエーの1というピースを探している。02行目の2.6秒の沈黙では、Tが説明書と板の対照をしている。03行目でTが「エーの1で」と発話しはじめ、Mに対してこれから一緒に必要なピースを探そうと誘っているように見える。すると04行目でMは、「エーってどっちでしたっけ」と発話し、「だっけ」という「自分が知っているはずのことを思い出せない」ことを示す表現を使って、自分もピースを探す能力を持っていることをTに伝える。05行目でTは視線をパーツに向けてMが左手で持ち上げている板にはまったピースを指しながら「これでした」という過去の表現を用いて発話し、今指さしているところはもうピースを外したあとのところであることを表明した。MはTが指しているところに視線を向けると同時に、ピース説明書と対照した後、07行目でMはTが指したピースを間違えたことを「え、2じゃなかったですっけ」と確認要求をし、今Tが指している、つまりもう使用したピースがA-2であると主張した。08行目でTは説明書を見ながらMの確認要求に「あそうか」と肯定的な応答をし、今指さして示したピースが間違っていたと認識できたことを示す。ここまでは、二人のピースの探す作業は失敗で終わっている。09行目で3.3秒の沈黙の間に、Tは取扱説明書を参照しつつ、探す作業を続けている。10行目でTが05行目で指した同じピースを指し示す。10行目では指差しせず、指示詞を「それ」に切り替えている。

05行目の時点で、板はSに近いが、Tは自分が先に認識できたピースをMに伝えるとき、指さししながら「これ」と発話し。その後、Mは視線をTが指しているところに向けている。そのような「指さししながらの指示→相手の視線を獲得」というプロセスで、指さしの受け手が同じピースを同定することが達成される。10行目では、同じく05行目の指示対象を指し示すのに、「ソ」系列を選んでいる。ここでTが直面しているのは二人の共同認識が達成された指示対象を再び指示することである。10行目の「それ」は現場指示としても文脈指示としても理解可能であるが、現場指示の用法と理解すれば、10行目ではMに近く、かつMの視線がもう向けられている指示対象を「聞き手なわばり」に属するものとする指示用法ともいえよう。際立たせる必要がないため、指差しなどの手ぶりも見られない。

次に、断片の16行目と18行目の指示詞の使用に注目してほしい。

10行目の後半でTは「あちがう。えとね」と発話し、この発話は何かを発見してMに伝えているように聞こえる。二人のエーの1というピースを探す活動は、一回失敗したがまだ終わっていない。Tは13行目で新しい情報を提示し、Mに伝えようとする。13行目のTの発話から、二人が大文字と小文字を混同していたことが分かる。14行目でTは「エーでしょう」という確認要求の形で相手の肯定的な応答を求め、15行目のMの応答を得た後、16行目で新しいピースを指し示した。16行目には二つの「これ」があるが、一つ目の「これ」はTが指さしながら目の前に置いてあるピース説明書を指している。Mより自分に近いため、正に「距離区分説」と「なわばり説」に一致している。二つ目の「これ」はMの手元の板にある対応するピースを指している。Tの「つまりこれ」と指さしによって、Mは視線を指示されたピースに向けて、指でピースを移しながら17行目で感嘆の声を出し、Tが言っていることが分かったことを表明している。MがTの指したところを認識できた後、18行目でTは視線をピース説明書に向けている。その時、16行目と同じピースを指し示すのに、指示詞が「そいつ」に切り替えている。Mが持ち上げている板にはまっているピースはMに近いため、Mのなわばりに属すと認識可能であり、なわばり説と一致している。ここまでの、二人はエー1というピースを探す作業を終えた。

この断片では二人のやり取りを行為の視点からとらえると、次のようになる。

行番号	05, 6 行目	10 行目, 18 行目
活動	ピースの同定活動	同定されたピースの再指示活動
行為	T が認識したピースを S に認識させる	二人が共同認識ができたピースを指示する
指示表現	「これ」+指さし	それ(10 行目)・そいつ(18 行目)
相手の反応	視線を向ける	自分の作業に集中する

以上の分析によって以下の結論が得られる。

- ① 相手に近いまたは相手のなわばりに属すと認識できる指示対象を「それ」だけではなく、「これ」で指し示すことがある。
- ② 発話者は相手に近い、または相手のなわばりに属すと認識可能な指示対象を指示するとき、自分が先に認識できたピースを相手に認識させるというピースの同定活動では、指さしながら「コ」系列で指し示し、相手の視線を獲得しようとする。二人が同じピースに共同認識が達成された後、相手に近いまたは相手のなわばりに属すと認識可能な指示対象を「ソ」系列で指し示す。
- ③ 指示詞の使用はただ発話の内容のみでなされているわけではなく、指さしや視線などの身体動作と深くかかわっている。「コ」系列は常に指さしと共起する。指さしは多数のピースから特定のピースを際立たせるには必要な非言語資源である。指さしの受け手は常に指さしの後に、指さししているところに視線を向ける。

6. 参考文献：

- 平田未季・山本真理 (2016). 共同注意確立活動におけるア系の有標性：会話分析の手法を用いた指示詞分析の一例 日本認知言語学会論文集, 16, 57 - 88.
- 平田未季 (2020). 共同注意場面による日本語指示詞の研究 ひつじ書房
- 金水敏・田窪行則(1992). 日本語研究資料集 指示詞 ひつじ書房
- 三上章(1955). 現代文法新説 くろしお出版
- 坂田雪子(1971). 指示詞「コソア」の機能について 東京外国語大学論集, 21, 125-138.
- 佐久間鼎 (1966). 現代日本語の表現と語法 刀江書院
- 正保勇 (1981). 「コソア」の体系 国立国語研究所(編) 日本語教育指導参考書 8 日本語の指示詞 国立国語研究所 pp. 51-122.

トランスクリプト (転写) に用いた記号の一覧	*--->	視線が後続の行まで継続している
** 指さしを行う話し手の視線の向きの開始と終了時点	*-->>	視線が事例の最後もしくはその後も継続している
†† 指さしの受け手の視線の向きの開始と終了時点	>>—	視線の開始時点が事例の開始時点よりも前
・・ 指さしを行う話し手のジェスチャーまたはふるまいの開始と終了時点	...	視線が対象に向かって移動中であることを示す
△△ 指さしの受け手のジェスチャーまたはふるまいの開始と終了時点	,,,	参加者の視線が対象から逸れていくことを示す
++ 指さしを行う話し手の指さしの開始と終了時点	#文字#	文字を指しているものを持ち上げる
ptg 指さし	U	うなずき